幼少期の自然体験活動が育児行動に及ぼす影響
――体験活動の内容や意識に着目して――

Influence of Childhood Nature Experience Activities on Parenting Behavior: Focusing on the Content and A Wareness of Nature Experience Activities

川畑　和也・泊　明希佳・下稲　美里

Kazuya Kawabata, Akika Tomari, Misato Shimoine

緒　言

幼児教育・保育の基本は「環境を通しておこなわれるもの[1)]」とされ、環境は人や物、自然環境や社会環境など多岐にわたる。その中でも現在ほぼ全ての幼稚園・保育園・幼保連携型認定こども園において、子供が直接自然環境に触れる機会が提供され、幼少期の自然体験活動には、多くの教育効果が期待されている[2)]。特にコロナ禍を経て、子供が自然に関わる機会を提供することの重要性は再認識されつつあり、日々の生活や遊びの中での体験的な学びを基本に、キャンプや遠足等の非日常的な体験による豊かな育ちの機会の充実について検討することは、重要なことであると考える。

国立青少年教育振興機構が実施したアンケート調査[3)] によると、子供の体験活動に関する保護者の意識としては「自分が子供の頃と比べて、遊ぶことができる場所が少なくなっている」、「自分が子供の頃と比べて、体験活動の機会が少なくなっている」という体験活動の減少を危惧する回答が多く見られる一方で、「学校の授業や行事では、子供たちが体験できる機会が十分にある」が６割以上、「私は子供たちと一緒に体験活動をすることは苦手である」、「自分の子供には、今は体験活動よりも勉強を優先させたい」という項目は３割未満であったと報告されている。つまり、体験活動の重要性を理解し、保護者も一緒になって実施しようとする意欲的な保護者が一定数存在することが考えられる。さらに幼少期の自然体験活動においては、保護者は我が子に対して普段の生活では味わえない体験をさせたいと考え、実際に我が子が自然の中で遊ぶ姿をみて、自然体験の魅力や子供の豊かな心、人間性を育む可能性を感じていることも報告されている[4)]。ここでの自然体験活動

とは、単に大自然の中で遊ぶということだけでなく、ある一定の教育目標に対し、自然を教育手段として、自然を活用しながらおこなわれる活動である[5)]。その中には、課題を克服する機会としての冒険教育の要素、自然に親しみ、理解を深める機会としての環境教育の要素、生活を体験的に学ぶ機会としての生活体験の要素、人と人との関わり方を体験的に学ぶ社会性教育の要素が含まれ[6)]、日常の生活の中で体験できない、あるいは不足した体験を補完する手段としての体験活動である。

幼少期における自然体験活動の経験が及ぼす影響として、子供の非認知能力や大人になった後の防災意識など様々な教育効果があることが明らかにされている[7) 8)]。また、母親の幼少期の自然体験及び家族体験の多さは、子供の問題行動を減少させる効果や、その子供たちが成人し、将来親として持つ養育態度や「教育力」においても、良い効果が推測できる可能性が示されている[9)]。他にも、過去の自然体験活動は、大人になった時のライフスタイル、結婚、出産・子育てに好意的な影響を及ぼすことも報告されている[10)]。

以上のように、幼少期からの自然体験活動には高い期待が寄せられ、その教育効果が明らかにされている。しかし保護者の幼少期の自然体験活動の実態を把握し、その内容や自然体験への意識などと、子供への育児行動との関係について検討したものは多くない。

そこで本研究では、幼少期の保護者、特に母親の自然体験活動の経験が、育児行動に及ぼす影響について検討することを目的とした。

方　法

調査対象及び調査時期

調査対象は、K県下のS幼稚園に通う子供を持つ母親を対象とし、同一園内に複数子供が在園している家庭があることも配慮し、回答については各家庭１回答とした。アンケート調査は2023年６月中におこない、母親に対しては園長、副園長、PTA会長等に調査協力を依頼した後、Google Formsを用いて実施した。アンケートは調査協力についての依頼文章とアンケートのURLを、園内の保護者用連絡掲示板アプリから送信する形で実施し、調査に協力いただける方から回答を得た。

調査内容

基本属性

基本属性として、年齢や現在の家族形態、子供の年齢等の回答を求めた。

子育てにおける母親の育児行動

母親の育児行動に関しては、寺薗・山口（2021）が作成した「母親の育児行動尺度」を用いた[11)]。この尺度は、母親が子供へ働きかける行動に着目したもので、12項目３因子からなるものである。下位因子は、「子供の発達を促す関わり」、「社会生活に向けての教育」、「基本的生活習慣の確立に向けての援助」となっている。それぞれの質問項目に対し、５件法（１．全く当てはまらない～５．非常に当てはまる）で回答を求めた。

幼少期の自然体験活動

母親の幼少期の自然体験活動に関しては、国立青少年教育振興機構が実施した全国調査[12]の中の体験活動に関する全18項目のうち、自然体験活動に関する９項目を引用し調査を実施した。全９項目に対して、３件法（１：ほとんどない、２：少しある、３：何度もある）で回答を求め、その合計得点を自然体験活動得点とした。なお、自然体験活動得点が高得点ほど幼少期の自然体験活動が豊富であることを示す。

自然体験活動に対する認識

母親の自然体験活動に対する認識に関しては、幼少期における自然体験活動の必要性について、自由記述で回答を求めた。

統計処理

対象者に対しておこなった基本属性に関する質問項目については単純集計をおこなった。また、自然体験活動に関しては、項目ごとに、「何度もある」、「少しある」と回答した者を肯定的回答とし単純集計をおこない、カイ２乗検定により全国平均との比較を実施した。

母親の育児行動については、子供の性別、年齢、出生順位、母親の就業形態、家族構成別に育児行動得点を算出し、平均値の差の比較（ｔ検定、一元配置分散分析）をおこなった。さらに、母親の幼少期の自然体験活動の経験による、現在の育児行動や自然体験活動に対する認識について検討するために、自然体験活動得点から Ward法によるクラスター分析をおこない、クラスターの名付けをおこなった。その後、各クラスターの育児行動得点を算出し、平均値の差の比較（一元配置分散分析）を実施した。

自然体験活動に対する意識については、テキストマイニングの手法を用いて、共起キーワードを作成した。共起キーワードとは、文章中に出現する単語の出現パターンが似たものを線で結んだ図であり、出現数が多い語ほど大きく、また共起の程度が強いほど太い線で描画されるものである。

統計処理については、シミック社製 HALBAU7を使用し、全ての統計的検定において５％未満を有意水準とし、10％未満を有意傾向とした。テキストマイニングについては、無料で公開されている User Local（https://textmining.userlocal.jp/）を用いた。

倫理的配慮

幼稚園の代表者に対しては、調査依頼文に基づき、研究趣旨を説明した後、研究協力は任意であり、協力しない場合や途中辞退しても不利益を被らないこと、回答結果等個人が特定されないようにすることを説明し、承諾を得た。また調査対象者の母親に対しては、研究参加は任意であり、回答をもって研究への同意とみなすこと、得られたデータは研究以外に使用されることはないこと、無記名であり研究結果の公表は個人が特定されることがないことをアンケートにも明記した。

結果と考察

調査対象者の属性

今回は、191世帯の家庭を対象に実施したアンケートに回答いただけたもので、かつ回答者が母親

の回答を有効回答とし、欠損値のある回答を除く118名（61.8%）を分析の対象とした。対象となる母親の年齢、就労形態、家族形態、対象とした幼稚園に通園中の子供の年齢、出生順位については、表１に示した。

表１　調査対象者と子供の属性

（n=118）　人数(%)

回答者の属性		子供の属性	
母親の年齢		性別	
20～24歳	0（ 0.0 ）	男	59（ 50.0 ）
25～34歳	2（ 1.7 ）	女	58（ 49.2 ）
30～34歳	21（ 17.8 ）		
35～39歳	53（ 44.9 ）	年齢	
40～44歳	41（ 34.7 ）	3歳児	27（ 22.9 ）
45～49歳	1（ 0.8 ）	4歳児	43（ 36.4 ）
		5歳児	48（ 40.7
母親の就労形態			
フルタイム	15（ 12.7 ）	出生順位	
パートタイム	45（ 38.1 ）	第1子	51（ 43.2 ）
専業主婦	58（ 49.2 ）	第2子	49（ 41.5 ）
		第3子	17（ 14.4 ）
家族形態		第4子	1（ 0.8 ）
核家族	110（ 93.2 ）		
多世帯同居家族	6（ 5.1 ）		
母子家庭	2（ 1.7 ）		

母親の現在の子育てにおける育児行動

対象とした母親の子育てにおける育児行動得点の平均値と標準偏差と、一元配置分散分析の結果を示す（表２）。分散分析をおこなったところ、それぞれの得点に有意な違いは認められなかったが、それぞれの得点は高い得点を示した。つまり、母親の現在の子育てにおいて、子供の発達を促す関わり、社会生活に向けての教育、基本的生活習慣の確立に向けての援助をバランスよくおこなっている集団であることが示唆される結果となった。

表２　母親の現在の子育てにおける育児行動得点

項目	子供の発達を促す関わり		社会生活に向けての教育		基本的生活習慣の確立に向けての援助		F-value
	M	SD	M	SD	M	SD	
保護者(n=118)	15.52	2.30	16.29	2.84	15.39	2.14	0.74　n.s.

また、「母親の年齢」、「母親の就労形態」、「現在の家族形態」、「子供の性別」、「子供の年齢」、「子供の出生順位」による育児行動得点の分析をおこなった結果、「母親の就労形態」と「現在の家族形

表３　母親の就業形態における育児行動得点の平均の比較

項目	フルタイム（n=15）		パートタイム（n=45）		専業主婦（n=58）		F-value	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD		
育児行動	48.53	4.41	48.78	5.29	50.66	4.69	2.27　n.s.	
子供の発達を促す関わり	15.93	1.59	15.49	2.56	15.81	2.32	0.32　n.s.	
社会生活に向けての教育	17.00	1.97	17.22	1.75	17.93	1.68	2.85　†	①<③、②<③
基本的生活習慣の確立に向けての援助	15.60	2.06	16.07	1.90	16.91	1.82	4.09　＊	①<③、②<③

†：p<.1、＊：p<.05

表４　現在の家族形態における育児行動得点の平均の比較

項目	核家族（n=110）		多世帯家族（n=6）		母子家庭（n=2）		F-value	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD		
育児行動	49.91	4.85	44.00	4.55	53.00	2.00	4.70　＊	②<①、②<③
子供の発達を促す関わり	15.79	2.31	13.50	1.98	17.50	0.50	3.43　＊	②<①、②<③
社会生活に向けての教育	17.63	1.77	15.83	1.34	18.00	1.00	3.00　†	②<①、②<③
基本的生活習慣の確立に向けての援助	16.50	1.91	14.67	2.06	17.50	0.50	2.89　†	②<①、②<③

†：p<.1、＊：p<.05

態」において、有意な得点の違いが見られる項目があった（表３、表４）。就労形態においては、専業主婦の母親の「社会生活に向けての教育」や「基本的生活習慣の確立に向けての援助」の得点が高い得点を示した。また、現在の家族形態においては、多世帯同居家族のすべての項目の得点が、核家族、母子家庭の得点より低い得点を示した。多世帯同居方家族においては、母親の就業促進に作用することが明らかにされている[13] が、両親だけでなく祖父母などを含めた子供に関わる人数が多く、日常的な育児サポートの手厚さによる育児の分散が、母親の育児行動得点の低さに影響を与えていると考えられる。

母親の幼少期における自然体験活動

母親の幼少期における自然体験活動の経験に対して「何度もある」、「少しある」という肯定的回答の割合と全国調査とのカイ２乗検定の結果を示す（表５）。

対象とした母親の幼少期における自然体験活動は全国調査と比較して、「海や川で泳いだこと（本研究：93.2%、全国調査：86.4%、p < .05）」、「チョウやトンボ、バッタなどの昆虫を捕まえたこと（本研究：94.0%、全国調査：80.2%、p < .01）」、「海や川で貝をとったり、魚を釣ったりしたこと（本研究：89.9%、全国調査：79.9%、p < .01）」、「太陽が昇るところや沈むところを見たこと（本研究：85.6%、全国調査：77.0%、p < .05）」、「野鳥を見たり、鳴く声を聞いたこと（本研究：83.0%、全国調査：74.5%、p < .05）」、「大きな木に登ったこと（本研究：75.5%、全国調査：61.9%、p < .01）」の６項目において有意に高い水準を示した（表３）。その他の３項目については、全国調査と比較して有意な差は見られず、幼少期における自然体験活動は、比較的多いことが明らかとなった。しかし「キャンプをしたこと」、「ロープウェイやリフトを使わずに、高い山に登ったこと」の項目においては全国調査と同様に低い割合であり、登山やキャンプといった比較的負荷の高い自然体験活動よりも、負荷の低い自然体験活動の経験が多いことが示される結果となった。

表５　母親の幼少期の自然体験活動の肯定回答と全国調査との比較

質問項目	肯定的回答割合(%) 本研究 (n=118)	全国調査 (n=12742)	
海や川で泳いだこと	93.2	86.4	*
夜空いっぱいに輝く星をゆっくり見たこと	84.7	84.6	
チョウやトンボ、バッタなどの昆虫を捕まえたこと	94.0	80.2	**
海や川で貝をとったり、魚を釣ったりしたこと	89.8	79.9	**
太陽が昇るところや沈むところを見たこと	85.6	77.0	*
野鳥を見たり、鳴く声を聞いたこと	83.0	74.5	*
キャンプをしたこと	64.4	67.0	
大きな木に登ったこと	75.5	61.9	**
ロープウェイやリフトを使わずに、高い山に登ったこと	59.3	57.8	

*：p<.05, **：p<.01

母親の幼少期の自然体験活動得点による類型化

母親の幼少期の自然体験活動得点をクラスター分析した結果、４つのクラスターに分類された（表６）。それぞれ、１クラスターが40.7%で最も多く、第２クラスター20.3%、第３クラスターと第４クラスターが共に19.5%であった。質問項目ごとの平均値を比較したところ、各クラスターの特性は以下のようにまとめられる。

第１クラスターは、第２クラスターと同じく比較的多くの項目で高い得点を示し、特に野鳥や星空観測など、身近な自然環境における活動が上位を占めている。またキャンプや登山経験といった

表６　母親の幼少期の自然体験活動からのクラスター分析の結果

質問項目	Cluster1	Cluster2	Cluster3	Cluster4
	n=48　40.7%	n=24　20.3%	n=23　19.5%	n=23　19.5%
海や川で泳いだこと	2.83	3.00	2.48	1.83
夜空いっぱいに輝く星をゆっくり見たこと	2.65	3.00	2.04	1.48
チョウやトンボ、バッタなどの昆虫を捕まえたこと	2.79	2.92	2.35	1.78
海や川で貝をとったり、魚を釣ったりしたこと	2.65	2.96	2.09	1.65
太陽が昇るところや沈むところを見たこと	2.50	2.96	2.09	1.44
野鳥を見たり、鳴く声を聞いたこと	2.67	2.96	2.04	1.49
キャンプをしたこと	2.04	2.46	1.52	1.30
大きな木に登ったこと	2.31	3.00	1.87	1.35
ロープウェイやリフトを使わずに、高い山に登ったこと	1.75	2.79	1.52	1.09

負荷の高い活動の得点は第２クラスターよりも低い。また４つのクラスターの中で、割合が最も高いグループであるため、「身近な活動者（n＝48）」のグループとした。第２クラスターは、全ての項目で高い得点を示し、他のグループと比較し、多くの自然体験活動を幅広くおこなっている傾向にある。また、キャンプや登山などの負荷の高い体験活動も多く実施しているグループである。今回対象とした母親は幼少期に比較的多くの自然体験活動をおこなっていたが、その中でも特に積極的に自然体験をおこなっていた「積極的活動者（n＝24）」のグループと考えることができる。第３クラスターは、第１クラスターと似たグループとなっており、負荷の高い体験が少ない傾向にある。しかし、海や川での活動や朝日や夕日観察に関する得点が上位に位置している。つまり、身近な環境に自然は少なく日常的な自然体験活動自体の経験は少ないが、比較的自然への関わりを意識的におこなっている「意欲的活動者（n＝23）」のグループであると考えることができる。第４クラスターは、全ての項目であまり高い得点を示していない。つまり、あまり自然体験活動に積極的ではない「消極的活動者（n＝23）」と分けることができた。

母親の幼少期の自然体験活動への意識

母親の幼少期の自然体験活動への意識を明らかにするために、テキストマイニングの手法をおこない、クラスターごとに共起キーワードを作成した（図１）。その結果、Cluster1：身近な活動者では、臨機応変な対応、集団生活における身の振り方、想像力や達成感を養うことなど、自然体験活動を通した学びや成果の獲得に着目して、幼少期の自然体験活動の必要性について回答をしていた。また、Cluster2：積極的活動者では、自然の摂理、自然の儚さ、美しさや自然との共存などに

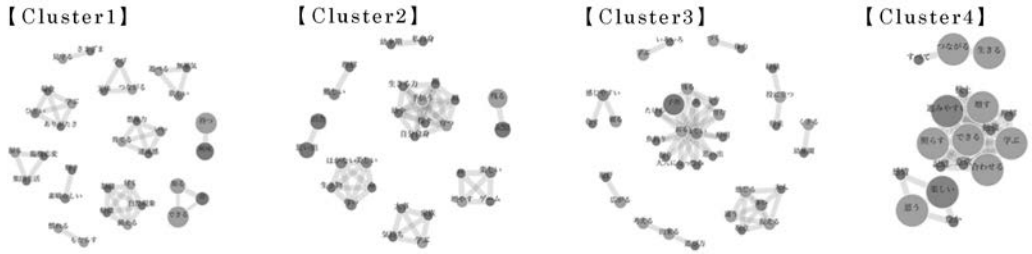

図１　Cluster ごとの幼少期の自然体験活動への意識

ついての内容が含まれ、自然体験活動で養う感性や他のものへの興味関心などに着目した回答があり、さらに自分自身の幼少期の自然体験活動の経験を踏まえた、肯定的な回答が多くなっていた。Cluster3：意欲的活動者では、将来大人になってから役立つ経験になる、多くの視点で物事を捉える、視野を広げるなど、自然体験活動を通した豊かな人間性や価値観の形成に着目して回答がされていた。Cluster4：消極的活動者では、様々な体験をしてほしい、感情や想像力が豊かになってほしいなど、体験をすることの重要性に着目して回答がされていた。

母親の幼少期の自然体験活動の類型化と現在の育児行動

母親の幼少期の自然体験活動の経験によって育児行動に違いが生じるかを明らかにするために、類型化された４つのクラスターにおける一元配置分散分析をおこなった。４つのクラスターごとにおける育児行動と下位項目の平均得点と標準偏差を示す（表７）。その結果、「育児行動」においては有意な得点の違いが生じなかった（F（3,114）＝1.70, n.s.）。また下位項目においても同様に検討をおこなった結果、「基本的生活習慣の確立に向けての援助」のみにおいて有意な得点の違いが生じ、多重比較の結果「積極的活動者」や「意欲的活動者」において、その他のクラスターより高い得点を示した。この結果は今回の調査対象とした母親が、幼少期の自然体験活動の経験が比較的に豊富な対象者であったため、その違いが見られなかったことも考えられる。しかしその中でも、より自然に多くの関わりを持っていたクラスターにおいては、育児行動の得点全般において高い得点を示す傾向が見られる結果となった。

表７　母親の幼少期の自然体験活動のクラスターごとの育児行動の比較

項目	Cluster1（n=48）		Cluster2（n=24）		Cluster3（n=23）		Cluster4（n=23）		F-value		多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD			
全体	48.83	5.00	51.50	5.64	50.09	4.79	49.09	3.72	1.70	n.s.	
子供の発達を促す関わり	15.52	2.30	16.29	2.84	15.39	2.14	15.78	1.89	0.74	n.s.	
社会生活に向けての教育	17.33	1.99	18.13	1.59	17.70	1.60	17.22	1.53	1.38	n.s.	
基本的生活習慣の確立に向けての援助	15.98	1.87	17.08	2.34	17.00	1.75	16.09	1.47	2.74	*	①<②、①<③、④<②

＊：p<.05

以上のことから、幼少期の自然体験活動の経験が子供への育児行動に違いを生じさせることや、育児行動に幼少期の自然体験活動の経験が影響を与える可能性が示唆された。近年、基本的生活習慣の獲得にあたっては、幼児教育施設に対して期待するしつけや教育として挙げられるなど、幼児教育施設での獲得が期待される傾向にある[14)]。そのような中で、自然体験活動の経験が豊富であったクラスターにおいて「基本的生活習慣の確立に向けての援助」の項目が高い得点を示したことは、家庭における育児行動の中で、基本的生活習慣の確立に向けて意識的に取り組むことができている母親が多いことを示していると考えられる。実際に、子供の頃に自然体験活動の経験が多いほど、大人になってからの人間関係や自立的行動習慣、自分に対する肯定的な意識が高いことが報告されている[15)]。また、母親の過去の自然体験及び自然体験に対する肯定的思考に関する検討から、母親の子供時代の自然体験が、現在の母親の子育て観やライフスタイルに影響を及ぼす可能性も示唆されている[16)]。これらのことからも、幼少期の自然体験活動の経験が、母親となった際の育児行動に良い影響を及ぼすことが示唆された。

結　論

本研究の目的は、幼少期の母親の自然体験活動の経験が、子供への育児行動に及ぼす影響について、自然体験活動の類型化をおこない検討することであった。幼児教育施設に通う子供を持つ母親を対象に、幼少期の自然体験活動の経験と育児行動に関するアンケート調査をおこなった。その結果、以下の４点が明らかとなった。

１）母親の幼少期の自然体験活動

対象とした母親の自然体験活動は、全国調査と比較し高い得点を示したが、高負荷な活動よりも、低負荷な体験活動の経験が多かった。

２）母親の育児行動

対象とした母親の育児行動は、バランスよくおこなわれており、母親の就業形態、家族構成によって異なることが明らかとなった。

３）自然体験活動による類型化

対象とした母親の自然体験活動の類型化から、「身近な活動者」、「積極的活動者」、「意欲的活動者」、「消極的活動者」の４つのクラスターに分けることができた。

４）各クラスターにおける幼少期の自然体験への意識や育児行動の違い

各クラスターにおいて幼少期の自然体験活動への意識が異なり、「積極的活動者」や「意欲的活動者」においては、母親の過去の経験から、自然体験活動によって育む感性や人間性、価値観の形成に着目した肯定的意見が多く見られた。またそれらのクラスターにおいては、「基本的生活習慣の確立に向けての援助」の項目において高い得点を示し、さらに自然への関わりが多いクラスターは育児行動の得点が高かった。

以上の結論から、幼少期における豊富な自然体験活動が育児行動に良い影響を与える可能性や、幼少期に好意的に自然に触れたことのある記憶が、より影響を与えることが示唆された。

子供の頃に多くの自然体験活動を含む多くの体験をおこなってきた保護者ほど、その子供も体験を多くおこなう傾向にあることや、保護者の自尊感情・人間関係等の資質・能力が高いほど、親子の関わりが多く、その子供は積極性等の自立的行動習慣が身についていることも報告されている[17)]。今後は、幼少期の自然体験活動の経験によって変化する保護者の育児行動が、子供たちに及ぼす影響等についても明らかにし、幼児教育の場や保育施設のみならず、家庭を巻き込んだ自然体験活動の充実に向けて検討を重ねていくことが望まれる。また、子供時代の経験が大人になってからの行動や意識に影響を及ぼすことを踏まえ、保護者と子供がより身近に自然体験活動をおこなうことができるような家庭支援についても検討したい。

引用文献

1）株式会社フレーベル館.（2017）. *幼稚園教育要領解説*. 株式会社フレーベル館.

2）高橋多美子・高橋敏之.（2007）. *幼児期における自然体験の重要性の再検討と教育的意義*. 理科教育学研究, **48**, 51–61.

3）国立青少年教育振興機構（2021）. *青少年の体験活動等に関する意識調査（令和元年度調査）報告書*.〈https://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/154/File/zentai.pdf〉（2023年７月25日アクセス）

4）国立青少年教育振興機構（2017）. *保護者が語る自然体験の魅力と成果～リックファミリーキャンプに参加した保護者へのヒアリング調査～*.〈http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/119/File/59f97d3e0f583.pdf〉（2023年７月25日アクセス）

5）文部科学省. *青少年と野外教育*. 青少年の野外教育の振興に関する調査研究者会議.〈https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701b.htm〉（2023年７月25日アクセス）

6）翠尾由美.（2019）. Ⅰキャンプの意義と目的：キャンプの意義. 日本キャンプ協会指導者養成委員会（編）, *キャンプ指導者入門第５版*（pp8–10）. 公益社団法人日本キャンプ協会.

7）川畑和也.（2022）. *防災教育からみた幼少期からの自然体験活動の有効性に関する一考察*. 日本野外教育学会第25回大会プログラム・研究発表抄録, pp50.

8）川畑和也・福満博隆.（2021）. *ESD自然学校における子どもを対象とした短期自然体験活動の教育効果に関する一考察－非認知能力に着目して－*. 鹿児島大学総合教育機構紀要, **4**, 76–83.

9）宮本康司・田中麻未・池田まさみ.（2015）. *幼少期の自然体験と成人後の養育態度との関連：母親の養育態度が子どもの生きる力へ及ぼす影響*. 東京家政大学研究紀要１人文社会科学, **55**, 85–91.

10）国立青少年教育振興機構.（2017）. *若者の結婚観・子育て観等に関する調査報告書*.〈https://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/111/〉（2023年７月25日アクセス）

11）寺薗さおり・山口桂子.（2021）. *「母親の育児行動尺度」の作成－「子育て期母親役割尺度」からの選定*. 小児保健研究, **80**, 164–171.

12）３）と同様.

13）西本真弓・七篠達弘（2004）. *親との同居と介護が既婚女性の就業に及ぼす影*. 家計経済研究, **61**, 62–72.

14）新井健一.（2009）. 保護者が幼稚園・保育所に期待すること. 後藤憲子. *「これからの幼児教育を考える」2009夏号*（pp12–16）. 株式会社ベネッセコーポレーション.

15）文部科学省.（2016）. *特集子供たちの未来を育む豊かな体験活動の充実*. 平成28年度文部科学白書.〈https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201701/detail/1398111.htm〉（2023年７月25日アクセス）

16）片瀬拓弥・碓井幸子・武田るい.（2019）. *母親の過去の自然体験及び自然体験に対する肯定的思考かが次子の出産動機に及ぼす影響について－全国子育てアンケートの分析－*. 青少年教育研究センター紀要, **7**, 32–41.

17）国立青少年教育振興機構.（2011）. *「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査」平成22年度調査報告書［概要］*.〈https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo5/008/gijiroku/__icsFiles/afiafieldf/2012/04/16/1319025_06.pdf〉（2023年７月25日アクセス）